

閻若璩『尚書古文疏證』演習（一）

野間 文史

解題資料

『尚書』研究の困難さ

- 1 成立と伝承の複雑さ Ⅱ 『尚書』文献学の煩雑さ
- 2 原典解釈の困難さ Ⅱ 『尚書』解釈学の困難さ

○段玉裁『古文尚書撰異』序

經惟尚書最尊。尚書之離厄最甚。秦之火、一也。漢博士之抑古文、二也。馬鄭不注古文逸篇、三也。魏晉之有僞古文、四也。唐正義不用馬鄭用僞孔、五也。天寶之改字、六也。宋開寶之改釋文、七也。七者備而古文幾亡矣。

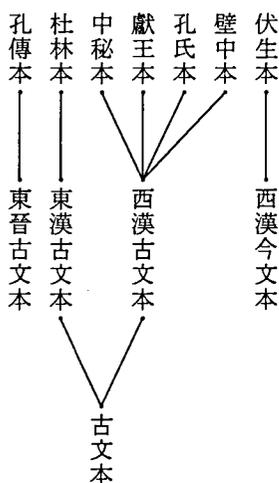
○韓愈「進學解」

周誥殷盤佶屈聱牙。春秋謹嚴。左氏浮誇。易奇而法。詩正而葩。

○朱熹『朱子語類』卷第七十八

伏生書多艱澁難曉、孔安國壁中書却平易易曉。（第四條）  
書有兩體、有極分曉者、有極難曉者。（第九條）

漢代以降の伝本（陳夢家『尚書通論』による）



東晉古文尚書の偽作について

南宋・吳棫く 『書裨傳』十三卷(佚)

南宋・朱熹 『朱子語類』卷第七十八 疑問を提示するのみ

元・吳澄 『書纂言』四卷(四庫全書・通志堂經解)

明・梅鷟さく 『尚書譜』五卷 (北京圖書館古籍珍本叢刊第一冊)

『尚書考異』五卷(北京圖書館古籍珍本叢刊第一冊)

四庫全書・平津館叢書・叢書集成初編)

清・閻若璩 『尚書古文疏證』八卷

清・惠棟 『古文尚書考』二卷(皇清經解)

清・王鳴盛 『尚書後案』三十卷(皇清經解 乾隆四十五年刊本)

清・毛奇齡 『古文尚書冤詞』八卷(四庫全書・西河合集)

甲骨・金文学の成果を踏まえた『尚書』解釈書

孫詒讓 『尚書駢枝』

于省吾 『雙劍謬尚書新證』

屈萬里 『尚書釋義』・『尚書集釋』

楊筠如 『尚書覈詁』

曾運乾 『尚書正讀』

加藤常賢 『真古文尚書集釋』明治書院

赤塚 忠 『書經・易經』中国古典文学大系

平凡社 1972

1964

清水 茂 『書經・春秋』\*中国詩文選 筑摩書房 1975

野村茂夫 『書經』中国古典新書 明德出版社 1974

池田末利 『尚書』全釋漢文大系 集英社 1976

尾崎雄二郎他 『詩經國風・書經』\*世界古典文学全集 筑摩書房 1981

加藤常賢・小野澤精一 『書經(上・下)』新釋漢文大系 明治書院 1983

『尚書研究書』

1983

尚書研究書

顧頡剛 『古史辨』等

陳夢家 『尚書通論』

張西堂 『尚書引論』

小林信明 『古文尚書乃研究』 大修館書店 1959

松本雅明 『春秋戦国における尚書の展開』風間書房 1966

平岡武夫 『經書の成立』全国書房 1946 創文社 1983

中江丑吉 『中国古代政治思想』岩波書店 1950・1975

著作集十二(弘生書林) 1988

閻若璩(1696—1764)の著作

尚書古文疏證八卷

四書釋地一卷續一卷又續二卷三續二卷

(四庫全書·皇清經解)

乾隆五十三年刊本·嘉慶八年刊本·二十一年重校本

潛邱劄記六卷(四庫全書·四庫珍本四集 乾隆十年刊本)

潛邱劄記二卷(皇清經解)

孟子生卒年考一卷(皇清經解)

毛朱詩說一卷(昭代叢書·楚州叢書)

閻潛邱先生年譜四卷 清·張穆 道光二十年刊

閻若璩研究文獻

容肇祖 閻若璩的考證學 嶺南學報 1—4 1930

錢穆 跋閻百詩尚書古文疏證 國立北平圖書館館刊 9—3 1935

『中國近三百年學術史』商務印書館 1937

第六章「閻潛邱、毛西河」

讀「閻潛邱年譜」——再論尚書古文疏證

書目季刊 10—1·全集 8 1976

戴君仁『閻毛古文尚書公案』中華叢書編審委員會 1963

蘇慶彬 閻若璩胡渭崔述三家辨偽方法之研究

新亞書院學術年刊 3 1961

許華峰 論《尚書古文疏證》與《古文尚書免詞》《尚書考異》的關係

經學研究論叢第一輯 1994

劉起鈺『尚書學史』第八章清代對尚書的考辨研究 中華書局 1980

林慶彰『清初的群經辨偽學』 文津出版社 1990

第四章考辨《古文尚書》

第三節 閻若璩考辨《古文尚書》

第四節 與閻氏同時考辨《古文尚書》諸家

李振興『尚書學述』上 東大圖書公司 1994

伍 古文尚書辨偽述略

吉田 純 尚書古文疏證とその時代 日本中國學會報第40集 1988

野村茂夫 疑「偽古文尚書考」(上)愛知教育大學研究報告 34 1985

疑「偽古文尚書考」(中)愛知教育大學研究報告 37 1988

『尚書古文疏證』の版本

『尚書古文疏證』八卷

乾隆十年原刻本(黄宗羲序・\*胡渭序・閻永序・閻學林序)

上海古籍出版社影印 1987)

四庫全書本(『古文尚書疏證』として著録)

續皇清經解本

嘉慶元年刊本

同治六年原刻重修本

目次

卷一	第一〜第十六	闕	第二十八〜三十
卷二	第十七〜第三十二	闕	
卷三	第三十三〜第四十八	全闕	
卷四	第四十九〜第六十四	補遺	第五十四・五十六・五十八・六十・六十三
卷五上	第六十五〜第七十二		
卷五下	第七十三〜第八十		
卷六上	第八十一〜第八十八		
卷六下	第八十九〜第九十六		
卷七	第九十七〜第一百十二	闕	第一百二・一百八〜一百十
卷八	第一百十三〜第一百二十八	闕	第一百十二〜一百二十七

内容分類(林慶彰氏前掲書による)

- 一 従書籍之著録、篇數考辨
- 二 従《尚書》佚文證《古文尚書》之偽
- 三 従抄襲古書字句和文意處辨別
- 四 従禮制、官制、曆法、地理等證《古文尚書》之偽
- 五 従偽書的文章考辨

参考

だから清代、考証学の研究方法が進歩して、閻若璩(一六三六—一七〇四年)という学者が尚書古文疏証を著わし、書経の一部は偽作ではないかという疑問を提出した際に、世間はあっと驚いたものである。但しこの疑問は既に宋代の朱子から胚胎し、代々の学者が疑いを深めてきたものなので、閻若璩に至ってそれが大成されたわけであったから、大義名分の上からの反対は深く受け取れないですんだ。併し当時の学界の大御所であった毛奇齡(一六二三—一七一六年)などからは強い反撃を蒙った。

著者の閻若璩は世間に遠慮してか、その生存中にはこの書を出版することをせず、そのため伝写されて伝わるうち、その一部が散佚してしまい、今に至るまで空白が残っている。毛奇齡の反対にも拘わらず、彼の説は次第に学界の賛成を受け、乾隆帝の四庫全書の中にもその書がちゃんと採録されており、提要の解説でも、毛奇齡の反対を退けて、閻若璩の説を、根拠のある発言だから、奪うべから

ざるもの、として支持している。遠慮したのは反って官僚や学界で、  
両広総督として学者たちのパトロンであった阮元（一七六四—一八四  
九年）が、清朝時代に成った経書に関する研究の最も重要なものを  
網羅した叢書、皇清経解を編集したときに、尚書古文疏証はその採  
録の中から、恐らくは故意に、洩らされている。この叢書が最初に  
一応の完成を見たのは道光九年（一八二九年）であるが、その後五十  
余年を経て、王先謙（一八四二—一九一七年）が統皇清経解を編纂した  
とき、初めて尚書古文疏証がその中に収載され、一般の学者が容易  
に見ることができるようになった。著者が死んでから後、実に二百  
年近くもたっている。経書と名のつくものに対する批判が、如何に  
憚り多いものであったかが、これによっても察せられよう。

〔宮崎市定『論語の新研究』（岩波書店 一九七四年 『宮崎市定全集4』  
所収）解題より〕

以上並びに次ページ「尚書百篇異同表」は、ほぼ先師池田末利教授  
『尚書』（集英社 1976）解題に基づく。



凡例

- 一 本稿は閻若璩『尚書古文疏證』卷一の訓読・注釈・補説から成る。
- 二 底本は皇清經解本・乾隆十年原刻本とを対校した本文を用いる。

尚書古文疏證卷一

太原閻若璩百詩撰

平陰朱纘暉近堂梓

- 第一言兩漢書載古文篇數與今異
- 第二言古文亡於西晉亂故無以證晚出之僞
- 第三言鄭康成註古文篇名與今異
- 第四言古文書題卷數篇次當如此
- 第五言古文武成見劉歆三統歷者今異
- 第六言古文伊訓見三統歷及鄭註者今遺
- 第七言晚出泰誓獨遺墨子所引三語爲破綻
- 第八言左傳載夏日食之禮今誤作季秋
- 第九言左傳德乃降之語今誤入大禹謨
- 第十言論語孝乎惟孝爲句今誤點斷
- 第十一言孟子引書語今誤入兩處
- 第十二言墨子引書語今妄改釋
- 第十三言左傳引夏訓語今彊入五子之歌
- 第十四言孟子引今文與今合引古文與今不合
- 第十五言左傳國語引逸書皆今有
- 第十六言禮記引逸書皆今有且誤析一篇爲二

第一 兩漢書に載する古文の篇數は今と異なり

漢書儒林傳に「孔氏に古文尚書有りて、孔安國今文字を以て之を讀み、因りて以て其の家の逸書を起し、十餘篇を得たり。蓋し尚書茲（ま）ます是より多し」、藝文志に「古文尚書は孔子の壁中より出づ。武帝の末、魯の共王孔子の宅を壞（やぶ）ちしとき古文尚書及び禮記・論語・孝經、凡て數十篇を得たるに、皆な古字なり。孔安國は孔子の後なり。悉く其の書を得、以て二十九篇を考するに、多きこと十六篇を得たり。安國之を獻するも、巫蠱（まじ）の事に遭ひて、未だ學官に列せず」、楚元王傳に「魯恭王孔子の宅を壞ち、以て宮を爲らんと欲して、古文を壞壁の中に得たり。逸禮に三十九有り、書は十六篇なり。天漢の後、孔安國之を獻ず」とあり。夫れ一たびは則ち「多きこと十六篇を得たり」と曰ひ、再びは則ち「逸書は十六篇」と曰ふ。是れ古文尚書の篇數の西漢に見ゆる者此の如きなり。

後漢書杜林傳に「林前に西州に於いて漆書の古文尚書一卷を得、常に之を寶として愛し、艱困に遭ふと雖ども、握持して身を離さざりしも、後に出だして衛宏等に示し、遂に世に行はる」とあり。同郡の賈逵之が爲に訓を作り、馬融・鄭康成の傳し注解せしは、皆な是の物なり。夫れ「古文尚書一卷」と曰ひ、篇數を言はずと雖ども、然れども馬融の書序には、則ち「逸十六篇」と云ふ。是れ古文尚書の篇數の東漢に見ゆる者又た此の如きなり。

此の書、何時遂に亡びしかを知らず。東晉の元帝の時、豫章の内史梅賾（ばい）忽ち古文尚書を上る。增多の二十五篇、其の文辭格制の迥然（はるかに）とおい」として類せざるを論ずる無くして、只だ此の

篇數の合はざるのみにて、偽なること知るべし。

按ずるに古文尚書は實に多きこと十六篇なり。惟だ論衡の載する所、其の説は互ひに異なり。其の正説篇に云ふ、「孝景帝の時、魯の共王孔子の教授堂を壊ちて以て殿を爲らんとし、百篇尚書を牆壁中に得たり。武帝使者をして取りて視しむるも、能く讀む者莫し。遂に中に秘して、外見るを得ず。孝成皇帝の時に至り、張霸百兩の篇を偽造す。帝秘せる百篇を出だして以て之を校す」と。愚謂へらく、成帝の時に秘書を校理せしは、正しく劉向・劉歆父子なり。東京の班固に及びても、亦た其の職を典る。豈に親しく古文尚書百篇を見たるに、而も乃ち爾云ふ者有らんや。劉は則ち「十六篇の逸」と云ひ、班は則ち「多きこと十六篇を得たり」と云ふこと、確然として據るべし。王充の論衡に至りては、或は傳聞に得たりしならん。傳聞せると親見せるとは、固より並びて論じ難きなり。且つ「武帝使者をして取りて視しむ」と云ふ。「安國之を獻す」と云はずして、「武帝取りて視しむ」と云ふは、此れ何に據れるや。惟れ「孝景帝の時、魯の共王孔子の宅を壊つ」と云ふは、漢志の「武帝末」の三字に較べて、則ち確甚なるは何ぞや。魯の恭王は孝景の前三年の丁亥を以て徙りて魯に王となり、徙りて二十七年にして薨ずれば、則ち薨せしときは武帝の元朔元年の癸丑に當たる。武帝は方に即位して十三年なれば、安んぞ「武帝末」と云ふを得んや。且つ恭王は初め宮室を治むるを好みしも、季年には音（音楽）を好めば、則ち其の孔子の宅を壊ちて以て其の宮を廣めしは、正に初めて魯に王たるときの事にして、當に「孝景時」三字に作るを是と爲すべし。愚嘗て謂へ

らく、傳記・雜説は往往にして史文の誤りを證するに足る、と。要は識者の之を決勝するに在るのみ。

又按ずるに、孔壁の書は景帝の初に出で、而して武帝の天漢の後に、孔安國始めて獻じ、巫蠱倉卒の難に遭ひて、未だ施行するに及ばざれば、則ち其の相去ること已に六十餘年にして、安國の壽は必ず且に高からんとす。孔子世家の「安國は今皇帝の博士と爲り、臨淮太守に至るも、蚤く卒す」を考ふるに及べば、則ち孔壁の書の出でしとき、安國は固より未だ生まれざるなり。故に大序にも亦た「悉く書を以て孔氏に還す。科斗の書は廢れて已に久しく、時人能く知る者無し」と云ふ。愚意へらく、書の屋壁中に藏せらるるは幾何年なるかを知らざるも、書の屋壁の外に出づるや、又た幾んど六十餘年なり。孔安國始めて隸古の字を以て更めて之を寫すときは、則ち其の「錯亂摩滅せること復た知るべからず」。豈に特に汨作・九共の諸篇のみならんや。即ち安國云ふ所の「知るべき者二十五篇」も、亦た必ずや字畫の脱誤せる、文勢の齟齬せるあらん。而るに（古文尚書は）乃ち明白順易にして、一字も理會の得ざる無し。又た何ぞ吳氏・朱子及び草廬の輩の切切然（ていねい）として之を議するを怪しまんや。

① 同郡買達——『後漢書』儒林傳の記述にもとづく。

② 東晉元帝時——梅賾が古文尚書を獻上したことについては、『尚書正義』舜典の条（33-01D）、『經典釋文』敍録、『隋書』經籍志等に見えるが、「增多二十五篇」には言及しない。

③ 劉則云十六篇逸——前引『漢書』楚元王傳参照。これは劉歆の話

の引用である。

④安國所云——『僞孔安國傳』尚書序。

**補説**——開卷第一「兩漢書載古文篇數與今異」は、梅賾献上の古文尚書の篇数が兩『漢書』の記述と合わないことを指摘し、「增多の二十五篇、其の文辭格制の迥然として類せざるを論ずる無くして、只だ此の篇數の合はざるのみにて、僞なること知るべし」と結論づける。

そして補説で、「傳記・雜説は往往にして史文の誤りを證するに足る。要は識者の之を選擇するに在るのみ」と述べ、檢証の資料としての「傳記・雜説」の重要性を指摘しつつも、その真偽に對する鑑識眼の高さを要求する。また「何ぞ吳氏・朱子及び草廬の輩の切切然として之を議するを怪しまんや」と述べて、古文尚書に疑義を呈した先学、南宋の吳棫・朱熹、元の吳澄の存在に言及している。

第一 兩漢書載古文篇數與今異

漢書儒林傳「孔氏有古文尚書、孔安國已今文字讀之、因已起其家逸書、得十餘篇。蓋尚書茲多於是矣」、藝文志「古文尚書者出孔子壁中。武帝末、魯共王壞孔子宅、得古文尚書及禮記論語孝經凡數十篇、皆古字。孔安國者孔子後也。悉得其書、以考二十九篇、得多十六篇。安國獻之、遭巫蠱事、未列於學官」、楚元王傳「魯恭王壞孔子宅欲召爲宮、而得古文於壞壁之中。逸禮有三十九、書十六篇。天漢之後、孔安國獻之」。夫一則曰「得多十六篇」、再則曰「逸書十六篇」。是古文尚書篇數之見於西漢者如此也。後漢書杜林傳「林前於西州得漆書古文尚書一卷、常寶愛之、雖遭艱困握持不離

身、後出示衛宏等、遂行於世」。同郡賈逵爲之作訓、馬融・鄭康成之傳注解、皆是物也。夫曰「古文尚書一卷」、雖不言篇數、然馬融書序則云「逸十六篇」。是古文尚書篇數之見於東漢者又如此也。此書不知何時遂亡。東晉元帝時、豫章內史梅賾忽上古文尚書。增多二十五篇、無論其文辭格制迥然不類、而只此篇數之不合、僞可知矣。

按古文尚書實多十六篇。惟論衡所載、其說互異。其正說篇云「孝景帝時、魯共王壞孔子教授堂以爲殿、得百篇尚書於牆壁中。武帝使使者取視、莫能讀者。遂秘於中、外不得見。至孝成皇帝時、張霸僞造百兩之篇。帝出秘百篇以校之」。愚謂、成帝時、校理秘書正劉歆父子、及東京班固、亦典其職。豈有親見古文尚書百篇、而乃云爾者乎。劉則云「十六篇逸」、班則云「得多十六篇」、確然可據。至王充論衡、或得於傳聞。傳聞之與親見、固難並論也。且云「武帝使使者取視」。不云「安國獻之」、而云「武帝取視」、此何據也。惟云「孝景時、魯共王壞孔子宅」、較漢志「武帝末」三字、則確甚何也。魯恭王曰孝景前三年丁亥徙王魯、徙二十七年薨、則薨當於武帝元朔元年癸丑。武帝方即位十三年、安得云「武帝末」乎。且恭王初好治宮室、季年好音、則其壞孔子宅已廣其宮、正初王魯之事、當作「孝景時」三字爲是。愚嘗謂、傳記雜説往往足證史文之誤。要在識者選擇之耳。

又按孔壁書出於景帝初、而武帝天漢後、孔安國始獻、遭巫蠱倉卒之難、未及施行、則其相去已六十餘年、而安國之壽必且高矣。及考孔子世家「安國爲今皇帝博士、至臨淮太守、蚤卒」、則孔壁之書出、安國固未生也。故大序亦云「悉以書還孔氏。科斗書廢已久、時人無能知者」。愚意、書藏屋壁中不知幾何年、書出屋壁之外、又幾六十餘年。孔安國始以隸古字更寫之、則其錯亂摩滅、弗可復知。豈特汨作九共諸篇已也。即安

國所云「可知者二十五篇」、亦必字畫脫誤、文勢齟齬。而乃明白順易、無一字理會不得。又何怪吳氏・朱子及草廬輩切切然議之哉。

## 第二 古文は西晉の亂に亡ぶ、故に以て晚出の偽を證する無し

嘗て疑ふらくは、鄭康成は獻帝の時に卒し、東晉の元帝を距つること尚ほ百餘年なれば、古文尚書十六篇の亡ぶるは、當に即ち此の百年中に亡ぶべし、と。後に隋書經籍志の「晉の世の秘府に存する所には古文尚書の經文有るも、今は傳ふる者有る無し。永嘉の亂に及び、歐陽大小夏侯の尚書は並びに亡ぶ。濟南の伏生の傳は、唯だ劉向父子の著はす所の五行傳のみ、是れ其の本法なるも、而も又た乖戾するもの多し。東晉に至り、豫章の内史梅賾、始めて安國の傳を得て、之を奏す」とあるを讀み、予然る後に、古文尚書は鄭康成の注せるより後、傳習する者已に希なるも、而も往往秘府に其の文有りしを知る。亦た猶ほ西漢の時、安國<sup>①</sup>は止だ其の業を都尉朝・司馬遷の數人に傳ふるのみなるも、而も中秘の古文は固より具に在るがごときなり。故に嘗て之が説を爲して曰はく、「古文尚書甚しくは西漢に顯はれざるも、而も卒に學官に立つを得たるは劉歆の力なり。學官に立たずと雖ども、而も卒に大いに東漢に顯はるるを得たるは賈逵の力なり」と。

安國の初めて壁書を傳ふるに當たりては、原より未だ大序と傳とを有せず。馬融の尚書序の謂はゆる「逸十六篇には、絶えて師說無し」<sup>②</sup>是れなり。漢室中興するに及び、衛宏訓旨を前に著はし、賈

逵 古文同異を後に撰し、馬融傳を作り、鄭氏注を作り、而して孔氏一家の學は粲然たり。意はざりき、鄭氏よりして後、寢く以て微滅するとは。博く羣書を極めし王肅・孫炎の如きの輩と雖ども、其の撰著を稽ぶるに、並びに古文尚書無し。豈いは其の時已に秘府に錮めて復た流傳せざるか。何ぞ未だ之に及ばざるや。然れども果たして秘府に其の書有れば、猶ほ人間に流傳するを得ん。惟だ不幸にして永嘉の喪亂に、經籍の道消えたり。凡そ歐陽大小夏侯の學の號して「經師遞ひに相講授す」と爲す者も、已に地を掃ひて餘り無し。又た何ぞ秘府に藏する所の區區たる簡冊に況べんや。故に古文尚書の亡ぶるは、實に永嘉に亡ぶるなり。嗟乎、嗟乎、伏生の口より出でし者、秦火も得て之を焚かざるに、孔氏の壁に出でし者、晉の亂には遂に得て之を滅せり。

予又た思へらく、秘府に果たして其の書を存すれば、世に假託偽撰の徒有りと雖ども、秘書を出だして以て之を校ぶれば、其の偽なること以て立ちどころに見るべし、と。成帝の時、天下に能く古文學を爲むるものを徵むるに、東萊の張霸造る所の百兩篇を以て應ずるも、帝 秘書を以て之を校べて是れを非とし、遂に張霸を吏に下せり。若し元帝の時、秘書猶ほ存する者有れば、則ち梅賾上る所の傳、何ぞ立ちどころに其の偽を窮むるを難しとせんや。惟だ秘府は既已に蕩びて煙と爲り、化して埃と爲れり。而して凡そ傳記に引く所の書の語の、諸儒並びに指して逸書と爲して的確知すべからざる者をば、此の書は皆な采輯掇拾し、以て證驗と爲す。而して其の言は率ね理に依り、又た復た張霸の偽書の比に非ず。世に劉向・劉歆・賈逵・馬融の輩のごとき鉅識のもの無くば、安んぞ翁然として

之を信じて以て眞の孔壁復た出づと爲さざるを得んや。

按ずるに、牛弘<sup>⑤</sup>古今の書籍の「厄」を歴陳し、「劉・石の馮陵し、京華の覆滅す」るを以て書の四厄と爲す。余之を兩晉に徴するに及びて益ます合す。秘書監の荀勗は、當代に藏する所の書目凡そ二萬九千九百餘卷を録し、中經簿と名づく。今は復た傳はらざるも、隋唐の時には尚ほ存す。故に經籍志に「晉の秘府に存するところに、古文尚書の經文有り」と云ふ、是れなり。元帝の初、漸やく更に鳩聚し、著作郎の李充、勗の舊簿を以て之を校ぶるに、才に十の一なるのみ。古文尚書の亡ぶるは、永嘉に亡ぶるに非ずして何ぞや。余因りて歎ず、前世の事、考ふべからざる者無し。特だ學者の書を觀ること少くして未だ見ざるのみ、と。王銍の言は殆ど是れを謂へるか。

又た按ずるに、東晉の元帝の時、梅賾書を上る者、草廬の言、實に孔穎達の舜典疏より來たり、經籍志と合す。但だ穎達は又た虞書の下に晉書の「前晉、其の書を奏上し、而して施行す」と云ふを引くも、「前」字は疑ふらくは「譌」ならん。然らざれば前晉に秘書見存すれば、偽書甯んぞ施行するを得んや。且つ今の晉書荀崧傳にては、元帝踐祚し、崧は太常に轉じ、時に方に學校を修め、博士を置き、尚書は鄭氏一人、古文尚書は孔氏一人なれば、則ち孔氏の立つは即ち斯の時に在るに似たり。穎達の引く所の晉書は、乃ち別の一本ならんも、今は考ふべき無し。

又た按ずるに、孫炎<sup>⑥</sup>、字は叔然、樂安の人。三國志王肅傳に其の「學を鄭玄の門人に受く」るを稱すれば、蓋し弟子の再傳なる者、肅と同時にして、是れ魏人爲らん。顔之推<sup>⑧</sup>以て漢末の人と爲

すは非なり。

- ① 安國止傳其業——『漢書』儒林傳の記述にもとづく。
- ② 衛宏著訓旨於前——『後漢書』衛宏傳。
- ③ 賈逵撰古文——『後漢書』儒林傳の記述にもとづく。
- ④ 成帝時——『漢書』儒林傳の記述にもとづく。
- ⑤ 按牛弘歷陳——『隋書』牛弘傳。
- ⑥ 秘書監荀勗——『隋書』經籍志の記述にもとづく。
- ⑦ 孫炎——これは本文「雖博極羣書如王肅孫炎輩」の補説として追加されたものである。
- ⑧ 顔之推——『顏氏家訓』音辭篇。

補説——本条は、「伏生の口より出でし者、秦火も得て之を焚かざるに、孔氏の壁に出でし者、晉の亂には遂に得て之を滅せり」と述べて、永嘉の乱による書籍の滅亡の多さを指摘している。

また「余因りて歎ず、前世の事、考ふべからざる者無し。特だ學者の書を觀ること少くして未だ見ざるのみ」という言葉に、閻若璩自身の博覽への自負心が伺えるようである。

第二 古文亡於西晉亂故無以證晚出之偽

嘗疑鄭康成卒於獻帝時、距東晉元帝尚百餘年、古文尚書十六篇之亡、當即亡於此百年中。後讀隋書經籍志「晉世秘府所存有古文尚書經文、今無有傳者。及永嘉之亂、歐陽大小夏侯尚書並亡。濟南伏生之傳、唯劉向父子所著五行傳、是其本法、而又多乖戾。至東晉、豫章內史梅賾始得安國之傳、奏之、予然後知、古文尚書自鄭康成注後、傳習者已希、而往往秘府有其文。

亦猶西漢時、安國止傳其業於都尉朝司馬遷數人、而中秘之古文固具在也。故嘗爲之說曰、「古文尚書不甚顯於西漢、而卒得立於學官者、劉歆之力也。

雖不立於學官、而卒得大顯於東漢者、賈逵之力也」。當安國之初、傳壁書也、原未有大序與傳。馬融尚書序所謂「逸十六篇絕無師說」是。及漢室中興、衛宏著訓旨於前、賈逵撰古文同異於後、馬融作傳、鄭氏作注、而孔氏一家之學粲然矣。不意鄭氏而後寢以微滅。雖博極羣書如王肅孫炎輩、稽其撰著、並無古文尚書。豈其時已緜於秘府而不復流傳耶、何未之及也。然果秘府有其書、猶得流傳於人間。惟不幸而永嘉喪亂、經籍道消。凡歐陽大小

夏侯學號爲「經師遞相講授」者、已掃地無餘。又何況秘府所藏區區簡冊耶。故古文尚書之亡、實亡於永嘉。嗟乎、嗟乎、出於伏生之口者、秦火不得而焚之、出於孔氏之壁者、晉亂遂得而滅之矣。予又思、秘府果存其書、雖世有假託僞撰之徒、出秘書以校之、其僞可以立見。成帝時、徵天下能爲古文學、東萊張霸以所造百兩篇應、帝以秘書校之非是、遂下張霸於吏。若元帝時、秘書猶有存者、則梅賾所上之傳、何難立窮其僞哉。惟秘府既已蕩而爲煙、化而爲埃矣。而凡傳記所引書語、諸儒並指爲逸書不可的知者、此書皆

采輯掇拾以爲證驗。而其言率依於理、又非復張霸僞書之比。世無劉向劉歆賈逵馬融輩之鉅識、安得不翕然信之以爲眞孔壁復出哉。

按牛弘歷陳古今書籍之厄、以「劉石馮陵、京華覆滅」爲書之四厄。及余徵之兩晉益合。秘書監荀勗錄當代所藏書目凡二萬九千九百餘卷、名中經簿。今不復傳、隋唐時尚存。故經籍志云「晉秘府存有古文尚書經文」是也。元帝之初、漸更鳩聚、著作郎李充以勗舊簿校之、才十之一耳。古文尚書之亡、非亡於永嘉而何哉。余因歎、前世之事無不可考者、

特學者觀書少、而未見耳。王鈺之言殆謂是與。

又按東晉元帝時、梅賾上書者、草廬之言、實從孔穎達舜典疏來、與經

籍志合。但穎達又於虞書下引晉書云「前晉奏上其書而施行焉」、前字疑譌。不然前晉秘書見存、僞書甯得施行耶。且今晉書荀崧傳、元帝踐祚、

崧轉太常、時方修學校、置博士、尚書鄭氏一人、古文尚書孔氏一人、則孔氏之立似即在斯時。穎達所引晉書乃別一本、今無可考。又按孫炎字叔然、樂安人。三國志王肅傳稱其「受學鄭玄之門人」、蓋弟

子再傳者、與肅同時、是爲魏人。顏之推以爲漢末人非。

第三 鄭康成の註する古文の篇名は今と異なり

尚書百篇の序は原自一篇爲りて、各篇の首に分けて眞かず。其の各篇の首に分けて眞くは、孔安國傳より始まるなり。鄭康成の註する書序は尚ほ自ら一篇爲りて、唐の世には尚ほ存せり。孔穎達の尚書疏には備に之を載するに、云ふ所の尚書の亡逸の篇數は、迥に孔傳と合はず。孔は則ち伏生に增多する者、二十五篇、鄭は則ち伏生に增多する者、十六篇なり。

二十五篇なる者は、即ち今の世に行はるる所の大禹謨一、五子之歌二、胤征三、仲虺之誥四、湯誥五、伊訓六、太甲の三篇九、咸有一德十、說命の三篇十三、泰誓の三篇十六、武成十七、旅獒十八、微子之命十九、蔡仲之命二十、周官二十一、君陳二十二、畢命二十三、君牙二十四、罔命二十五、是れなり。

十六篇なる者は、即ち永嘉の時に亡失する所の舜典一、汨作二、九共の九篇三、大禹謨四、益稷五、五子之歌六、胤征七、典寶八、湯誥九、咸有一德十、伊訓十一、肆命十二、原命十三、武成十四、

湯誥九、咸有一德十、伊訓十一、肆命十二、原命十三、武成十四、

旅葵十五、罔命十六、是れなり。十六篇をば、亦た二十四篇と名づくるは、蓋し九共は乃ち九篇なれば、其の篇を析ちて之を數ふ、故に二十四篇と曰ふなり。

鄭の註する所の古文の篇數は、上は馬融と合し、又た上は賈逵と合し、又た上は劉歆と合す。歆は嘗て秘書を校し、古文十六篇を得たり。民間に傳問するに、則ち安國の再傳の弟子たる膠東の庸生なる者有りて、學は此と同じきなり。逵の父の徽は、實に安國の六傳の弟子爲り。逵は父の業を受けて數しば帝の爲めに古文尚書と經傳・爾雅の詰訓と相應するを言ひ、故に古文遂に行はる。此れ皆な載せて史冊に在りて、確然として信すべき者なり。

孔穎達は漢儒授受の古文を信ぜずして、晚晉突出の古文を信ず。且つ舜典・汨作・九共の二十四篇を以て張霸の徒の偽造する所と爲すは、張霸の偽造する所は乃ち百兩篇にして、當時に在りても固より未だ嘗て其の欺を售はざりしを知らざるなり。百兩篇は藝文志に見えず、而して止だ儒林傳に附見するのみ。傳に云ふ「文意は淺陋、篇或は數簡。帝中書を以て之を校べて是れを非とす。霸は、父より受け、父に弟子の樊並有りと辭し、詔して其の書を存す。後に樊並の謀反するに及び、迺ち卒に之を黜く」と。曾ぞ馬融・鄭康成の諸大儒にして此等の偽書を信ずと謂へるや。大抵孔穎達は經を纂め傳を翼ぐることを功無しと爲さず。而るに第だ一説に曲げて徇ひ、敢へて他に從ふ莫し。毛詩・戴記の如きは、則ち惟だ鄭義をのみ之れ是として從ひ、尚書に至りては、則ち又た鄭を黜けて孔に從ふ。是れ皆な唐人の、章句を粹めて義疏を爲り、定めて一是と爲さんと欲する者の弊なり。噫、孰れか此の一是なる者、竟に未だ嘗て是な

らざるを知らんや。

按ずるに鄭康成書序に註するに、今の安國傳に見存する所の者、仲虺之詰・太甲三篇・說命三篇・微子之命・蔡仲之命・周官・君陳・畢命・君牙の十三篇に於いて、皆な註に「亡」と曰ふ。今の安國傳に絶えて無き所の者、汨作・九共九篇・典寶・肆命・原命の十三篇に於いては、皆な註に「逸」と曰ふ。特に此れのみならざるなり。又た安國傳の分出する所の舜典・益稷の二篇に於いては、皆な註に「逸」と曰ふ。是れ孔・鄭の古文は、獨に篇名の合はざる者のみならず、其の文辭も得て同じくすべからず。即ち篇名の適たま相符合する者も、其の文辭は亦た豈に得て盡く同じからんや。然らば則ち豫章晚出の書は、名づけて鄭沖に源流を爲すと雖も、正に未だ必ずしも孔壁の舊物爲らずと云ふ。

又た按ずるに、孔・鄭の古文既に此の如く其れ乖異せるに、乃ち説く者、必ず梅の獻する所の孔を信じて、鄭の受くる所の孔を信ぜざらんと欲し、遂に鄭の受くる所の孔を以て張霸の徒の偽撰と爲す。今張霸の書は已に傳はらざるも、而も王充の論衡に引く所に見ゆる者に、尚ほ數語有りて、「伊尹死して大霧あること三日」と曰ふ。此れ何等の語にして、馬・鄭諸儒をして見しむべけんや。僞泰誓の三篇は、世を歴ること既に久しきも、馬融尚ほ起ちて其の非を辨ず。張霸の百兩篇の若きは、甫て出でて、即ち敗れしこと、已に人の耳目に著かなる者なり。王充の淺識なるも、亦た未だ信ずべからざるを知るに、而も馬・鄭諸儒の識顧て王充の下に出でんや。然らば則ち汨作・九共二十四篇は必ず之を孔壁に得るものにて、「左氏より采り、書敘を按ず」る者の能く

作る所には非ざるなり。

又た按ずるに、隋書經籍志に「尚書逸篇二卷有り。齊梁の間に  
出づ。其の篇目を考ふるに、孔壁中書の殘缺なる者に似たり。故  
に尚書の末に附す」と云ふも、今は亦た傳はらず。但だ其の篇目  
は是れ汨作・九共等なるべきか否かを知らず。果たして是れ汨作・  
九共等なれば、必ずや晉亂の餘の彫磨零落し、尚ほ什に其の一・  
二を人間に存する者ならん。其の時に當たりて、孔傳方に盛行し、  
而して世に又た好古の士の能く康成註する所の逸篇の數を取りて  
以て一一校對し、康成の言をして信ずべしと爲さしむる無く、而  
して竟に復た隻字の存するもの有らざるは、惜いかな。然らざれ  
ば則ち是れ齊梁の間の事を好む者之を爲るなり。尚書五十八篇  
には、原より嘉禾篇無し。而るに王莽傳に書の逸嘉禾篇の「周公  
鬯を奉じて阼階に立ち、延きて登る。贊に曰はく、假王政に莅  
み、勤めて天下を和せよ」と曰ふを引くこと有るは、此れ必ず王  
莽の時に僞作する所なり。何となれば、漢人は災異を尚ぶ、故に  
張霸の書に「伊尹死して大霧あること三日」の説有り。王莽は居  
攝せんと欲す、故に羣臣の奏に「周公假王と爲る」の説有り。  
蓋し僞書を作る者、其の時の尚ぶ所に因れるもの多きか。文辭格  
制も、亦た時代に限らる。力を極めて洗刷し出脱すと雖ども、終  
に其の本色を離るる能はず。此れ亦た以て類推すべきなり。

又た按ずるに、新唐書藝文志に「尚書逸篇三卷」有りて、晉の  
徐邈の注と爲せば、宋初には猶ほ存せり。李昉等太平御覽を修  
めしとき、曾て之を引用す。余約ぼ其の四條を見るに、其の一  
條は重出す。其の三條に云ふ、「堯の子は不肖なれば、舜丹淵

に居りて諸侯爲らしむ、故に號して丹朱と曰ふ」、又た「嗚呼、  
七世の廟は以て德を觀るべし」、又た「大社は惟れ松、東社は惟  
れ柏、南社は惟れ梓、西社は惟れ栗、北社は惟れ槐。天子の社は  
廣さ五丈、諸侯は之を半ばにす」とあり。余竊かに謂へらく、「堯  
の子は不肖なれば、舜丹淵に居らしむ云云」は、即ち漢書律歷  
志の「堯天下を虞に譲り、子の朱をして丹淵に處りて諸侯爲ら  
しむ」に本づく。「嗚呼、七世の廟は以て德を觀るべし」は、即  
ち呂氏春秋に引ける商書に「五世の廟は、以て怪を觀るべし」と  
曰ふを用ひ、而して「五」を易へて「七」と爲し、「怪」を「德」  
と爲すは、亦た孔傳に同じ。「大社は惟れ松云云」は、即ち白虎  
通德論に引ける尚書に「大社は惟れ松」と曰へる五句を用ひ、而  
して下「天子の社は廣さ五丈」に連ぬるは、乃ち別に「春秋文義」  
に出づ。見る所此の如きを以てすれば、則ち見ざる所の者は、諒  
に亦た傳會多きこと知るべし。余故に曰はく、此れ齊梁の間の事  
を好む者之を爲るなり、と。而して又た晉の儒者徐邈の注に假  
託して、以て自ら重くす。嗚呼、事は古を好むより大なるは莫く、  
學は譌を正すより善きは莫し。韓昌黎古書の正僞を識るを以て、  
年の進むと爲せるは、豈に我を欺かんや。

又た按ずるに、伏生勝の尚書大傳三卷、鄭康成の註せる者も、  
今は亦た傳はらず、僅かに他書に散見するのみ。宋の王伯厚の困  
學紀聞に云ふ、「虞傳に九共篇有り。引ける書に曰はく、『予下  
土を辯じ、民をして平平たらしめ、民をして傲る無からしむ』と。  
殷傳に帝告篇有り。引ける書に曰はく、『章を施し乃ち服し、上  
下を明らかにす』と。豈いは伏生も亦た古文逸篇を見たるか」と。

余謂へらく、王氏の説は非なり。壁中の逸書には九共有れども帝告無し。縦使ひ伏生見るに及ぶも、亦た應に「章を施し乃ち服し、上下を明らかにす」の一語有るべからず。竊かに意へらく、伏生は正記の二十八篇の外に、又た殘章剩句、未だ遺忘を盡さざる者有れば、諸を其の徒に口授す。而して勝の歿するの後、其の徒の張生・歐陽生は各おの聴く所を雜記し、以て斯の傳を纂成せるなり。然らざれば鄭康成は固より九共の逸書を見たる者なり。苟くも眞出の九共に非ざれば、康成甯ぞ之が爲めに註を作らんや。但だ又た「引ける盤庚に曰はく、若く徳明らかなるかな。湯任父の言、卑應の言」、又た「引ける酒誥に曰はく、王曰はく、封よ。唯れ曰若に圭璧ありとは、皆な古文に無き所なり」と。豈いは今文に獨り有るのみなるか、今は考ふべき無し。然れども劉向は中の古文を以て、傳ふる所の今文を校ぶるに、酒誥には脱簡の一有り。諒に業として補正を爲したるも、未だ酒誥に復た増文有るを聞かざるなり。疑ふらくは或は後人の傳會に出でしものにて、未だ必ずしも一一諸を伏生に受けずと云ふ。

又た按ずるに、今の汲冢周書をば、漢志は正に「周書」と名づけ、班固は以て「周史記」と爲し、顔師古は「蓋し孔子論ずる所の百篇の餘ならん」と云ふ。六朝の人も亦た之を「尚書逸篇」と謂ふこと、南史劉顯傳を觀れば見るべし。傳に云ふ、「任昉嘗て一篇の缺簡を得たるに、文字は零落し、諸人に能く識る者無し。顯一見して曰はく、是れ古文尚書刪る所の逸篇なり」と。昉周書を檢するに、果たして其の説の如し」と。

- ① 傳問民間——『漢書』楚元王傳の語。
  - ② 達父微——『後漢書』賈逵傳にもとづく。
  - ③ 王充論衡——『論衡』感類篇。
  - ④ 采左氏按書敘——『漢書』儒林傳の語。
  - ⑤ 齊梁間好事者爲之也——本条の補説でも繰り返すように、閻氏は『僞孔安國傳』を「齊梁の間の事を好む者之を爲るなり」と見なしている。
  - ⑥ 堯子不肖——『太平御覽』卷六十三「丹水」の条、また卷七十一「淵」の条。
  - ⑦ 嗚呼——『太平御覽』卷五百三十一「宗廟」の条。
  - ⑧ 大社惟松——『太平御覽』卷五百三十二「社稷」の条。
  - ⑨ 呂氏春秋——『呂氏春秋』有始覽・論大篇。
  - ⑩ 白虎通徳論——『白虎通義』社稷篇。なお「尚書」は『尚書』逸篇である。
  - ⑪ 韓昌黎——韓愈「答李翊書」。
  - ⑫ 宋王伯厚困學紀聞——王應麟「困學紀聞」卷二。また王應麟「玉海」卷三十七にも同様の指摘が見える。
  - ⑬ 然劉向以中古文校所傳今文——『漢書』藝文志にもとづく。
- 補説**——孔穎達『尚書正義』を「經を纂め傳を翼くること、功無しと爲さず」として一定の評価を与えつつも、「而るに第だ一説に曲げて徇ひ、敢へて他に從ふ莫し」と述べるのは、後に『五經正義』の欠点「曲徇注文」として指摘されることの先蹤であろう。また「蓋し僞書を作る者、其の時の尚ぶ所に因れるもの多きか。文辭格制も、亦た時代に限らる。力を極めて洗刷し出脱すと雖ど

も、終に其の本色を離るる能はず。此れ亦た以て類推すべきなり」という指摘は、古典の成書年代を決定する基準の一つとなり得るものである。朱熹が「伏生書多艱澁難曉、孔安國壁中書却平易易曉」、「書有兩體、有極分曉者、有極難曉者」と疑義を呈したことへの、具体的回答である。

第三 鄭康成註古文篇名與今異

尚書百篇序原自爲一篇、不分實各篇之首。其分實各篇之首者、自孔安國傳始也。鄭康成註書序尚自爲一篇、唐世尚存、孔穎達尚書疏備載之。所云尚書亡逸篇數、迥與孔傳不合。孔則增多於伏生者二十五篇、鄭則增多於伏生者十六篇。二十五篇者、即今世所行之大禹謨一、五子之歌二、胤征三、仲虺之誥四、湯誥五、伊訓六、太甲三篇九、咸有一德十、說命三篇十三、泰誓三篇十六、武成十七、旅獒十八、微子之命十九、蔡仲之命二十、周官二十一、君陳二十二、畢命二十三、君牙二十四、冏命二十五、是也。十六篇者、即永嘉時所亡失之舜典一、汨作二、九共九篇三、大禹謨四、益稷五、五子之歌六、胤征七、典寶八、湯誥九、咸有一德十、伊訓十一、肆命十二、原命十三、武成十四、旅獒十五、冏命十六、是也。十六篇亦名二十四篇、蓋九共乃九篇、析其篇而數之、故曰二十四篇也。鄭所註古文篇數、上與馬融合、又上與賈逵合、又上與劉歆合。歆嘗校秘書得古文十六篇、傳問民間、則有安國之再傳弟子膠東庸生者、學與此同。逵父徵實爲安國之六傳弟子。逵受父業、數爲帝言古文尚書與經傳爾雅詁訓相應、故古文遂行。此皆載在史冊、確然可信者也。孔穎達不信漢儒傳授受之古文、而信晚晉突出之古文。且以舜典汨作九共二十四篇爲張霸之徒所僞造、不知張霸所僞造乃百兩篇、在當時固未嘗售其欺也。百兩篇不見於藝文志、而止附見儒林傳。傳云「文

意淺陋、篇或數簡。帝曰中書校之非是、霸辭受父、父有弟子樊並、詔存其書。及樊並謀反、迺卒黜之」。曾謂馬融鄭康成諸大儒而信此等僞書哉。大抵孔穎達纂經翼傳、不爲無功、而第曲徇一說、莫敢他從。如毛詩戴記則惟鄭義之是從、至於尚書則又黜鄭而從孔。是皆唐人稗章句爲義疏、欲定爲一是者之弊也。噫、孰知此一是者、竟未嘗是也哉。

按鄭康成註書序、於今安國傳所見存者、仲虺之誥・太甲三篇・說命三篇・微子之命・蔡仲之命・周官・君陳・畢命・君牙十三篇、皆註曰「亡」。於今安國傳所絕無者、汨作・九共九篇・典寶・肆命・原命十三篇、皆註曰「逸」、不特此也。又於安國傳所分出之舜典・益稷二篇、皆註曰「逸」。是孔鄭之古文不獨篇名不合者、其文辭不可得而同。即篇名之適相符合者、其文辭亦豈得而盡同哉。然則豫章晚出之書、雖名爲源流於鄭沖、正未必名孔壁之舊物云。

又按孔鄭之古文既如此其乖異矣、乃說者必欲信梅所獻之孔、而不信鄭所受之孔、遂以鄭所受之孔爲張霸之徒僞撰。今張霸書已不傳、而見於王充論衡所引者、尚有數語、曰「伊尹死、大霧三日」、此何等語、而可令馬鄭諸儒見耶。僞泰誓三篇、歷世既久、馬融尚起而辨其非。若張霸百兩篇、甫出而即敗、已著於人耳目者。王充淺識、亦知未可信、而馬鄭諸儒識顧出王充下耶。然則汨作・九共二十四篇、必得之於孔壁、而非「采左氏按書敘」者之所能作也。

又按隋書經籍志云「有尚書逸篇二卷、出於齊梁間。考其篇目、似孔壁中書之殘缺者、故附尚書之末」、今亦不傳、但不知其篇目可是汨作・九共等否。果是汨作九共等、必晉亂之餘、彫磨零落、尚什存其一二於人間者。當其時、孔傳方盛行、而世又無好古之士能取康成所註逸篇之數以一一校對、使康成之言爲可信、而竟不復有隻字存矣惜哉。不然則是

齊梁間好事者爲之也。尚書五十八篇，原無嘉禾篇。而王莽傳有引書逸嘉禾篇曰「周公奉鬯立於阼階，延登，贊曰，假王莅政，勤和天下」。此必王莽時所僞作。何也，漢人尚災異，故張霸書有「伊尹死，大霧三日」之說。王莽欲居攝，故羣臣奏有「周公爲假王」之說。蓋作僞書者，多因其時之所尚與。文辭格制，亦限於時代。雖極力洗刷出脫，終不能離其本色，此亦可以類推也。

又按新唐書藝文志有尚書逸篇三卷，爲晉徐邈注，宋初猶存。李昉等修太平御覽，曾引用之。余約見其四條，其一條重出。其三條云「堯子不肖，舜使居丹淵爲諸侯，故號曰丹朱」，又「嗚呼，七世之廟可以觀德」，又「大社惟松，東社惟柏，南社惟梓，西社惟栗，北社惟槐。天子社廣五丈，諸侯半之」。余竊謂，「堯子不肖，舜使居丹淵云云」，即本漢書律歷志「堯讓下於虞，使子朱處於丹淵爲諸侯」。「嗚呼，七世之廟可以觀德」，即用呂氏春秋引商書曰「五世之廟可以觀德」，而易「五」爲「七」，「怪」爲「德」，亦同孔傳。「大社惟松云云」，即用白虎通德論引尚書曰「大社惟松」五句，而下連「天子社廣五丈」，乃別出「春秋文義」。以所見如此，則所不見者，諒亦多傳會可知矣。余故曰，此齊梁間好事者爲之也。而又假託晉儒者徐邈注以自重。嗚呼，事莫大於好古，學莫善於正譌。韓昌黎以識古書之正僞爲年之進，豈欺我哉。

又按伏生勝尚書大傳三卷，鄭康成註者，今亦不傳，僅散見他書。宋王伯厚困學紀聞云「虞傳有九共篇，引書曰『子辯下土，使民平平，使民無傲』，殷傳有帝告篇，引書曰『施章乃服，明上下』。豈伏生亦見古文逸篇耶」。余謂，王氏之說非也。壁中逸書有九共，而無帝告。縱使伏生及見，亦不應有「施章乃服，明上下」一語。竊意，伏生於正記二十八篇外，又有殘章剩句，未盡遺忘者，口授諸其徒。而勝歿之後，其徒張

生歐陽生，各雜記所聞以纂成斯傳。不然鄭康成固見九共逸書者。苟非眞出九共，康成甯爲之作註耶。但又引盤庚曰「若德明哉，湯任父言，卑應言」，又引酒誥曰「王曰，封，唯曰，若圭璧」，皆古文所無。豈今文獨有乎，今無可考。然劉向以中古文校所傳今文，酒誥有脫簡一，諒業爲補正，未聞酒誥復有增文也。疑或出後人傳會，未必一一受諸伏生云。

又按今汲冢周書，漢志正名「周書」，班固以爲「周史記」，顏師古云「蓋孔子所論百篇之餘」。六朝人亦謂之「尚書逸篇」，觀南史劉顯傳可見。傳云「任昉嘗得一篇缺簡，文字零落，諸人無能識者。顯一見曰，是古文尚書所刪逸篇。昉檢周書，果如其說」。